

アンダーマイスキ

## 目次

アンダーマイスキン	5
アンダーウォーター	111
無防備な彼女	257

アンダーマイスキ

ずっと避けてきたけれど、女として社会人になったら必須なもの。

だけど、社会人四年目の私、鈴木久美子が大大嫌いなもの。

それはストッキング。

「久美子。慣れだよ、慣れ」と友達には諭された。

友達の実家は青森で、すごいことに青森の女子中高生は冬、みんな黒タイツなのだそうだ。

なんと校則に「冬季は黒のタイツもしくはストッキング着用」とあり、靴下を履いていくと怒られるんだって。具合が悪くなって保健室に行っても靴下だと、そんなものを履いてくるから具合が悪くなるんだと叱られるらしい。怖いな！

「青森で冬に靴下を履くなんて、何頑張っちゃってんのか思われるわよ」

そもそも寒すぎて冬に足を出そうなんて思わないし、女は冷やしちゃいけないのだから、あきらめてストッキングを穿きなさいと言われれば返す言葉もない。

ちなみにたまに靴下の子もいるにはいるとのこと……肌色ストッキングの上に靴下装備らしいけ

ど。そこまでしていたら確かに何頑張っちゃってるの、だ。

さらに青森では雪がメートル単位で降るものだから、自然とブーツ丈はロングになってしまい、結果夏より冬の方がスカート率が高いらしい。パンツルックじゃ確かにブーツインするくらいしかコーデイネイトできないね。

でもここは雪深い東北じゃなくて関東だ。

足にびったりと張り付いて皮膚呼吸ができないような感じがまず嫌だ。嫌ならストッキングを穿かなくてもいいような服装をすればいいんだけど、下半身デブの私はボトム選びがいつも大変なのだ。

下半身デブは辛い。特に尻と太ももがかいってというのが本当に辛い。

だっつき、なまじつかウエストが普通なものだから、店員さんとか当然すすめてくるじゃない、九号、Mサイズをさ。でもさ、着られないわけですよ。着られないって最初からわかっているんだから断ればいいのに、断れないわけだよ、変な見栄と、ちよっぴりの希望のせい。もしかしたら穿けるかもって思ってしまったって。

でも試着した時の切なさったらない。

足を入れて引き上げた時、ある一点から上がらなくなるあのやるせなさ。特にパンツ、ストレッチの効かないやつ。本当にあの時の感情は言葉では言いつくせない。

かといってお尻や太ももに合わせて買うと、必然的にウエストはガバガバ。だから今まで私はジャストサイズのジーンズに巡り合ったことがない。

一応瘦せる努力は常に行っているんですよ？

しかし残念ながら服のサイズがワンサイズダウンしたとしても、ウエストとお尻と太ももの比率は変わらないわけで。

結果私が選ぶボトムは、サイズ選びが比較的楽なスカートばかりになる。

本当はパンツのほうが楽だし、好き。無駄毛の処理とかさばれるし、寒くないし、何よりもストッキングを穿かなくていいし。だけど下半身デブの味方であるストレッチの効いたタイプは下着の線が気になるし、お尻や太ももの形が丸わかりだし、どうにも生地質感がオバさんっぽい。

散々悲しい思いをしながらも色々なスカートのタイプを試してみても、私の身体が一番細く見えるのはタイトな造りのものだったことに気がついた。ふんわりひざ丈スカートは一見万能選手っぽいですが、ひざが隠れているとんだか足が太く見えるのだ。

隠すだけじゃなくて、ある程度出すことも必要なわけです。肉を斬らせて骨を断つてやつですね。座った時にひざが見えるかな、見えないかな、というくらいの丈がベストなので試着は絶対。プリーツは可愛いけど、身長一六三センチの私にはちよつと幼い感じ。学生っぽいとか。プリーツが細かければぎりぎりセーフって感じかな。ティアドやバルーンは下半身にボリュームが出すぎ。カーゴは横のポケットが太ももを強調しちゃう。

その点、下がきゅつとすぼまっているコクーンやマーメイド、びしつとスリットの入ったタイトスカートはでかいお尻をカバーしてくれるのですよ。

逆に目立ちそうって思うかもしれないけど、意外や意外、お尻がまああるく納まってくれます！

ポイントは腰から下に向かって広がってないデザイン。あ、マーメイドは太ももの下から広がっているから大丈夫なの。タイト系のスカートなら、仕事着にぴったりなきちんと感もある。

そんでストラップのついたパンツで足首を強調し、さらに足を細く見せるのだ。

試行錯誤の末に行きついたマイゴールデンバランス。

ぶつちやけ、いつも似たような格好だよねって言われているのは知っている。シルエットが一緒だから、どんなに小物に凝っても色とか変えてみても同じに見えるんだよね。

でもさ、毎日雑誌の着回し特集みたいにコーディネートを頑張るほどファッションにこだわっているわけじゃないし。なるべくしないようにしているけれど、上下セットで買ってあげば、他のセットと組み合わせる週に二回はいけるし。そもそも仕事しに来ているんだから、流行を追いかけるよりもきちんとしていて細く見える格好の方がいいでしょって、他の人の言うことなんてあんまり気にしないようにしていた。

でもそういう格好なら尚更ストッキングは穿かないとダメなんだよね。ウチの会社はナマ足厳禁。レギンスもトレンカも、不可。

夏のパンストなんて地獄だよ。暑いし、蒸れるし、汗かくし。

ハイソックスやニーハイで誤魔化したりもしてみたけれど、これまたゴムの締め付けでかぶれて履けなくなってしまう。

せめて可愛いデザインのものをと思っても大抵がM〜Lサイズで、私の穿くL〜LLサイズ以上となると種類がガクンと減る。有名モデルやタレント監修のものは軒並みアウト。

ストッキングも一定のサイズを超えちゃうと選ぶ余地があんまりないんだよね。そのうえ苦労して見つけ出して買っても、すぐに伝線して穿けなくなる。安い三足いくらのなんて、おろしたのを穿いている最中にダメになることもあるし、かといって高ければ耐久性に優れているってわけでもない。洗濯には強くても、何かにひっかけちゃえば結局は安いものと一緒だ。

そのたびにイライラしながらも、必需品だからと諦めていたのだけれど、ある時通販でパンストをまとめ買いしようとしたら、ふとガーターストッキングが目に入った。

あんまり高くなかったし、ものは試して送料対策ついでに買ってみて、穿いてみたらびっくり。普通のパンストよりも丈夫だし、ちょっと貧乏くさいけど、同じようなタイプで揃えておけば片足が伝線して穿けなくなっても、もう片方は穿ける。さらにゴムの締め付けは靴下よりも優しいというそれに、私はコロリとやられてしまった。

なぜ今まで気付かなかったのだろうってくらい、それは解放的で、画期的だったから。

何しろずっと悩まされていたパンストの締め付けやらサイズやらを気にしなくともいいのだ！

最初はガーターレスタイプを穿いていたのだけれど、自然とガーターベルトにも興味が出てくる。一旦興味が出ちゃうともう終わり。ガーターベルトってブラやショーツとおそろいのデザインが多くて、それがまた可愛いものだから、あつという間に下着の半分以上を買い替えてしまった。はい、下着貧乏一丁、出来上がり。

でも毎日パンストを穿くたびに感じていたイライラが解消されたのだから安いもの。

だから、ほら、別にセクシーな理由で穿いていたわけじゃないのよ。

思いつきり実用一辺倒。

なんだけど……私は今、ストッキングが理由で窮地に立たされている。さっきまで広いフロアで一人寂しく必死で残業していたのに。

なぜだか私は椅子じゃなくて机の上に座っている。いや座らざるを得なかったのだ。

それで足元には、跪ひざまている男の人がいる。私の足の甲にうつとりと頬ずりしながら。

「……舐めてもいいですか？」

「だっだめです」

駄目に決まってるんだろ！ 足は舐めるものじゃありません！

「どうして？」

どうしてもこうしてもねーだろ！ そもそもそんなこと聞くな！

「だあつ、て、臭いす汚いですー！」

「……じゃあ、綺麗にできるところに行きましようか」

しししまった、墓穴掘った！

「だっだめですー！」

綺麗にできるところ↓洗えるところ↓お風呂って危険ルート！ 勘弁してくれ！

「どうして？」

どーしてもこーしてもないって！ 上目遣いに尋ねられても、そりゃこっちが聞きたいよ！

「それとも舐めて綺麗にして差し上げましようか？」

「もつ、もつとだめです！」

「じゃあ、綺麗にできるところに行きましょうね」

ちゅ、と音を立てて足の甲にキスされて、私の腰は砕けた。ぐったりと机に仰向けに倒れ込む。積み上げられていたファイルの山がいくつか崩れた。背中にさつき閉じたパソコンの熱を感じる。

何がどーなってこーなってんの？

「ふふ、可愛い。あとでゆっくり、ね」

かかかか回避不可？ 動け私の足！ しっかり支える腰！

ていうか、いい加減、人の足から手を離してください、高野課長！

今日私はいつもどおり広いフロアでぽつんとひとり残業していた。

私の仕事は営業一課の営業さん七人のサポート事務。

本当は事務一人につき担当する営業さんは三人つてことになっているから、完全にキャパオーバー状態。これは先日同じ課の恵美ちゃんが急に退職することになって、彼女の分の仕事も私がすることになってしまったからだ。

ウチの会社は昔堅気といえばまあよく聞こえるけれど、男女雇用機会均等法が施行されてもう三十年近く経つこの世の中で、いまだにガツガチの旧体質、男尊女卑の会社だったりする。

女性社員は一般職にしかならず、同期入社でも男性と女性ではあきらかに給与に差がある。女性の昇給は雀の涙程度。そんな会社なら女性はさっさと辞めちゃいそうなのに、なぜかほとんどの人

は辞めない。

それは産休だけでなく育休も取得可能という、女性が結婚して子供ができて長く続けられる環境が整っているから。中でも一番の利点は子育てしている人の遅刻や早退にすごく寛容で、有休も取りやすいところ。

勤務年数の長い女性社員は口を揃えて「この会社、給料は安いけど長く勤めるにはいい会社」と言う。バリバリのキャリアを目指すことはできないけれど、ゆるーくながーく仕事をするには確かに向いている会社だと思う。いや、この平成大不況の中、潰れなければただけだね。

だからできちゃった結婚だった恵美ちゃんも、出産後も働く気満々だった。

会社の方も今までのように恵美ちゃんの産休・育休中に来てもらう派遣さんの手配を考えてくれていたらしいけれど、やっぱり妊娠というものは予定どおりにいくとは限らないらしい。

二ヶ月前、恵美ちゃんは切迫流産で病院に担ぎ込まれた。その場で入院を言い渡され、結局そのまま退職ということになってしまったのだ。

仕方がないとはいえ、恵美ちゃんの退職はあまりにも急だった。そのため派遣さんを頼むの間に合わず、間の悪いことに半期ごとにある定期の人事異動もちょうど済んだばかりで、社内の人を新たに動かすことも難しいと言われてしまった。

とりあえず応急的な対応ということで、恵美ちゃんの後任が来るまで残業代はタイムカードおとり全額支給するっていう確約をいただき、私は彼女の分の仕事を引き受け、せつせと残業に励むことになった。なるべく二、三ヶ月以内、長くても半年以内には何とかすると部長が言ってくれたから、

期間限定と割り切って残業代を稼ごうと自分に言いかけさせて。こうしてこの広いフロアで私一人だけ残業、なんてことが当たり前になった。

電話応対や接客に時間を取られない分、終業後の方が書類仕事は進むから、残業そのものは嫌じゃない。……仕事が終わった後、特に予定があるわけじゃないし。

それにもともと営業事務は他部署の事務よりも残業になりやすい。外回りしていた営業さんが定時間際に会社へ戻ってくる時に仕事を持って帰ってくるから。

電話やメールで出先から指示をくれるのは比較的若い人だけで、四十代、五十代のオッサンたちはこっちが帰ろうと支度している時に「これやっとして、明日の朝までに」とか平気で仕事を投げてきやがるのだ。一瞬だけけど殺意が湧くよ、ホント。少しは申し訳ないって顔をしゃがれ！

そんな本日の残業は大量の顧客情報の入力だった。

作業そのものは、印刷された顧客情報に営業さんたちが赤ペンで訂正を入れたものを入力し直すというすごく単純なものだけけど、いかんせん量が多すぎた。

それに加えて顧客情報は間違っって消去しないようにと、項目を訂正するたびに確認のメッセージが出る仕様になっているものだから、非常に面倒くさいのだ。

私のパソコンは支給されてまだ一年つとこなのに、すでにエンターキーの文字が剥げはるくらい酷使されている。たまに右手の小指がつりそうになるもんね。

面倒くさい入力作業を終えて、システムを終了させる。時計を見ればもう二十一時過ぎだ。結構頑張ったなあ。

両手を組み、うーんと伸びをする。そのまま軽く肩の付け根を引っ張ってストレッチ。

パソコン作業って知らず知らずのうちに前のめりになっちゃうから、肩とか、肩甲骨のあたりがコリコリになっちゃう。目も奥の方からじわじわと痺しびれるような痛みが湧いてくるし。また眼科に行って疲れ目用の目薬を処方してもらった方がいいかも。

あとは顧客情報がプリントされた書類をシュレッダーにかければ終わりなんだけど、営業課に置いてあるシュレッダーは家庭用に毛が生はえた程度のものでよく詰まるから、大量に処理する時はいつも総務課のシュレッダーを借りている。けどこの時間だと当然総務課の人はもう誰もいない。

明日手のあいた時に行けばいいかなとも思ったけれど、できることなら今日中に終わらせてしまいたい。明日は明日でまた違う仕事が山積みだもん。

今、このフロアに私以外は誰もいないし、ゴミさえきちんと捨てておけば無断借用してもバレないだろう。ちょっと使ったからといって目に見えて減るものでもない。

書類の束とゴミ箱を抱えて総務の方へ向かう。しょっちゅう借りているから操作はお手の物だ。全ての書類を切り刻むと、たまったゴミを持ってきたゴミ箱に入れる。

溢れんばかりの紙くずをなんとか押し込んで、よいしょと持ち上げたら。

「苦労さま」

「はー」

急に背後から声をかけられて、驚いた私は思いっきりゴミ箱を取り落とした。

「ああ、すみません。急に声をかけたから驚かせてしまったね」

慌てて振り向くと、そこには総務課の高野課長がいた。

「いやっ、あのっ、こちらこそすみません！」

何しろ勝手に総務課に入り込んで、シュレッダーを使用している。

怒られても仕方ない。

「いいですよ。シュレッダーですよね？ いつも総務課に借りに来ていたでしょう」

「あ、はい、そうです……」

「ゴミさえ片付けてもらえれば、別にかまいません」

でも私が声をかけたせいで散らかしてしまいましたね、と高野課長が苦笑する。確かに私がゴミ箱を落としたせいで、周囲に細かく裁断された紙くずが散乱してしまっていた。

「今、ほうきを持ってきますから、手で拾える分は拾っておいてもらえますか？」

「いやっ！ 私がやります！」

シュレッダーを使っていたのはこっちだし、散らかしたのもこっちだし。そもそもうちの会社では掃除は女性社員の仕事だ。

「私が驚かせたせいですから、一緒に片付けましょう」

そう言うと、高野課長は身を翻して小走りに廊下へ出ていった。

高野課長、なんて優しいんだらう……。ミスにしても怒鳴ったり不機嫌になったりはしないって本当だったんだな。

私の所属する営業一課の隣にある、総務課の高野課長。

同じフロアにあるといっても、人の出入りの多い営業課と個人情報扱を扱う総務課はパーティションでしっかり区切られているから、顔を合わせる機会は意外と少ない。

業務で関わるとしてもそれこそシュレッダーを借りたり、たまに外出する時についてを頼んだり頼まれたり、その程度だ。そのわずかな接点もわざわざ課長に頼んだりするわけがないから、課長と直接話すことってほとんどなかったりする。一番最近話したのは、確か恵美ちゃんの退職書類についてだったかな。

まあ同じ会社だから交流が皆無ってわけではない。けどこのフロアには経理課・総務課・営業一課・二課があり、その総勢は軽く五十人を超えているから、普段の飲み会とかは基本的に課ごとに行われる。

純粹に他の課と交流できる機会は大規模な人事異動があった時の歓送迎会くらい。忘年会もあるにはあるのだけど、それは温泉旅館に社員旅行として全社員で行く。そうなるとやっぱり女性社員だけでまとまっちゃって他の課の男の人とはあまり話さない。

そもそも私は社内情勢やら社内恋愛やらの情報収集にあんまり熱心じゃないから、自ら進んで他課の男性社員に話しかけることなんてほとんどなかった。

給湯室と女子トイレとランチタイムの情報はすごいよ。だれそれが誰狙いだとか、あそこは不倫しているらしいとか、そういう情報ってたとえ隠していたとしても一度でも尻尾を掴まれば、あつという間に皆の話の種にされてしまふ。

だからそういう情報網に引っかけられない、つまり独身ではあるけれど、どうやら社内恋愛を今ま

でしてないらしい高野課長について、私はよく知らない。

もちろんまるつきり何にも知らないってわけじゃない。ちらほら話を聞いたりするとはある。

でも、酒はザルでいくら飲んでも酔わないらしいとか、だれその結婚式の余興で某男性五人組アイドルの振付を完璧にやったらしいとか、ミスを注意する時も怖くないとか、社会保険労務士の資格を持っているとか、耳にするのはホントどうでもいいお茶受け情報。

ただ、たまたま総務の近くを通った時にちらつと見た、メタルフレームの眼鏡の両端を親指と薬指で挟んで片手で上げる仕草が素敵だなと思った。

眼鏡を上げる仕草ってちよつとグツとくるでしょ。真ん中を中指でぐつと押し上げるのもインテリっぽくていいけど、親指と薬指で両端を持って挟むようにして上げるのって男の人しかしないじゃない？ 目を隠すみたいになさ。

なんかそれがちよつとよかつたっていうのが、私の中のささやかな高野課長のイメージ。

ちなみに私も眼鏡着用ですが、手の甲で下から押し上げるといいう、色気も何もない感じですよ。

そんなことを思い出しながら屈んで散らばった紙くずを拾い集めていたら、高野課長がちり取りとほうきを持ってきてくれた。

ウチの会社は暗黙の了解で掃除は女性社員の仕事になっているから、男性社員の中には掃除用具のありかを知らない人も結構いるんだよね。

そんな中、高野課長は掃除用具の収納場所をきちんと知っている人だったみたい。さすが総務課長だなあ。

細かい屑をほうきで掃き集めて、これまた高野課長が持ってきてくれたゴミ袋に入れる。

ほんと、気配りのできる人だわ。女性の多い総務課だからなのかな。

ウチの課長なんて全然気がきかないし！

「ほうきは私が返しに行ってくださいますから」

「いいですよ。私を持ってきましたから、私が返しに行きます」

廊下は暗いですが、まだ仕事が残っているでしょう？ と言われて、仕事そのものは終わっていたけどパソコンは付けっぱなしだったし、机の上を片付けてなかったから、お願いしてしまった。紙くずでばんばんになったゴミ袋も一緒に片付けてくれる。

うう、会社の人にこんなに優しくしてもらったの、いつぶりだろ……

年富の営業さんたちは営業事務を使ってナンボと思っているふしがあつて、あれどこにあつたっけ、これどうすればいいんだっけ、と些細なことで出先から電話してきたりする。契約書の記入の仕方とか確認された日にはね、一体何年営業やってんだって聞いただしたくなつたよ。仕事の指示とかは何回お願いしてもしてくれないくせにな！ おかげで私の仕事はいつも中断中断また中断。私はあんたのサポート役ではあるけれど、奥さんじゃねーっつーの！ そのくせ営業成績はいいっていうのが、本当に謎。

ゴミ箱を所定の位置に戻したあと、パソコンを終了させ、机の上に出しっぱなしになっていた電卓やペン、クリアファイルなんかを机の中に戻して、と振り返ると。

あとは確認に使ったファイルを棚に戻して、と振り返ると。

「ひゃっ！」

なぜかものすごく近くに高野課長がいた。

「終わりました？」

「あ、はい、このファイルをしまったら」

「……じゃあ、いいかな」

何がいいのか？ と首をかしげていたら、高野課長は自然な動作で私の腕からファイルを取り上げた。びっくりしつても代わりに柵に戻してくれるのかなと思つたら……ほん、と机へ向かつて放り出す。

なんで？ 宙を舞ったファイルに目をやった瞬間、課長を見失った。

あれ？ って反射的に目で探したら、さつきよりもずっと近くに課長がいた。思わず後退あしひきつてしまふくらい、近く。まるで詰め寄るみたいに、迫ってくる。それも微笑みながら。

何？ 私、何か、やらかした？

「誘惑されました」

「え、と、何に？」

い、一体、どうなっているの？ 誘惑？ 何が？

「あなたの足に」

課長はすっくと跪ひざまずいて私の右足に触れる。そしてゆっくりとその甲に唇を寄せた。

何が起きているの？ ていうか、なんで課長が私の足に、キス、するの？

わけがわからない。思わず課長から逃げるように机の上に腰をのせて床から足を上げる。だって

後ろはすぐ机だから他に逃げるところがなかったんだもん！

ところがそれは、課長にとっては願ったり叶ったりの体勢だったのだ。這はいつくばるように身を屈かめていた課長は、ふっと顔を上げ、にっこりと音が聞こえそうな笑みを浮かべた。

「触れても、いいんですね？」

机の上に座った私の足は、中途半端に宙に浮いて、まさしく課長に向かって差し出しているようになっていて。気付いた時には課長の手の中に収まってしまっていた。

そう、そんなつもりは全くなかったのに、机の上に座る私と、跪いて足にキスをする課長という、なんかおかしな構図が出来上がってしまったのだった。

だから、なんでー!?

状況を全く把握できず、呆然としている私。その間にも課長は私の足を好き勝手にし始める。

ゆっくりと、唇が足の甲に押しつけられる。薄いストッキング越しに感じる唇の柔らかさと吐息がくすぐったくて、やっと私は我に返った。

「課長！ 何するんですか？」

「何って、あなたの足に口づけしていますか」

「そっそんなの見ればわかりますっ！ 違くて、そういうことじゃなくて！」

知りたいのは、なんで足にキスをするのかですよ！

慌てる私とは対照的に、課長は鷹揚わうように答える。

「あなたの足が、そうしてくださいと言っていたので」  
「言ってません！」

「言っていないっ！ 断じて言っておりません！」  
「ではなぜ」

高野課長の手でストラップが外されて、足からパンプスが滑り落ちる。

「ガーターストッキングなんか穿いているのですか？」

いやだからそれは機能的に優れているから穿いているんですけど。それ以外に理由って普通ありませんよね。ていうか、なんで私がガーターストッキング穿いているの知ってるんですか？

「穿いちゃ駄目なんですかっ？」

いや馬鹿、私、言いたいことも訊きたいこともそういうことじゃなくてだねっ。だけど、この質問は高野課長の琴線に触れたらしい。唇を足から離し、高野課長は少し考え込むように首を捻って、言った。

「駄目ではありませんよ。ただ」  
「ただ？」

「中途半端に隠されているから……」  
か、隠されているから？

「……暴きたくはなってますね」

……すみません、全く理解できません！

だけど、こんな状況になってしまったのは、私がガーターストッキングを穿いているせいってわけ？ そんな理由になるの？

なるわけないだろうー！

なんでなんで？ どうしてどうして？ そればかりが頭の中を駆け巡って、どうしていいか、さっぱりわからない。

課長の言動の示すところが理解不能すぎて、私はもう完全に混乱してしまった。

その後も執拗に足を舐めたがる課長にどうにか諦めてもらおうとしたけど、課長の方が上手で、反論するたびに墓穴を掘ってしまう。

まず課長との攻防の途中で机へ仰向けに倒れ込んでしまったこの体勢を何とかしなきゃいけない。でも、どうしたらいいんだろう。

一般的な女子はこういう時、気のきいたお断り文句や方法を持っているのかな。いや、そもそも普通こういう事態に陥らないよね？

「あなたのスカートのスリットがいけない」

そんなことばかり考えていたら、いつの間にか立ち上がっていた高野課長の指が、私の脇腹から腰をゆつくりとなぞり、太ももを撫でてスカートの裾を揺らした。なんか、その、ハグ的な感じになっちゃいませんか。

それにどこ触っているんですか。言いがかりです責任転嫁ですっ。そもそもタイトスカートって絶対にスリットが入ってますっ。じゃないとまともに歩けないんだから！

「……見せつけているのでしょうか、中身を」

見せてません、見せてませんって！ むしろ隠そうと一生懸命です！ このでかい尻をなんとかしたくて毎日必死なんですよ！

「いつも見えていたんですよ？ その隙間から、ね」

は、初耳なんですけど。見えていたって、ガーターストッキングが？ いや、そんな短い丈のスカート、穿いた覚えはないのだけど。スリットから見えていた？ そんな簡単に見えるものだっけ。ていうかなんでそんなに顔近いんですかっ！ 勘弁してください、お願いします！

「か、顔、近いです、課長お……」

まるでキスをする直前かと思うくらい近くに課長の顔がある。め、眼鏡が、お互いの眼鏡がぶつかってガチャガチャいいそうです、怖いです！

「嫌ですか？」

いやあの、嫌とかそういう問題ではなくてですね！ えつとえつと、上手うまく言えない！

「はうっ！」

か、課長、いつの間に指をストッキングの中に侵入させてんですか！

ふ、太もも撫なでるなあああ！ う、内側はやめてえええ！

お尻は服越しだし脂肪溜たまりめ込んでるからいいけど、いや、よくないけど、内ももはああああ！

「ふふ、敏感なんですね。……あとでと言ったけれど、今ここでもいいですか？」

「だだだだめです！ ここじゃあだめですー！」

首をぶんぶん振って全身で拒否拒否拒否！

あとでも今でも御免こうむります！

「じゃあ別の場所なら、いいんですね」

また墓穴掘ほっちゃまったあああ！

とかいうかようやく顔を少し離してくれたと思ったら、かちよおおお！ 耳たぶ、かつ噛かまないでえええ！

「本当にあなたって人は……たまらない」

だから息吹きかけないでえ！

「明日はお休みですからね。ゆっくり、可愛がってあげます」

どこをどう可愛がるって言うんですか！ ていうか明日まで響なくって何する気ですかあああ！ パニック状態の頭の中とは反対に、腕も足もちっとも動いてくれない。

「わかっていますか？ あなたが今どんな顔をしているか」

だから耳元でこしょこしょ話すなあああ！

「すごく……いやらしい」

……駄目だ、もう、立ち上がれない。

くったりと力が抜けたのを見計らったように、課長がまた脇腹わきを撫なでる。

「歩けますか？ ……それとも抱き上げて差し上げましょうか？」

「あああ歩けません、大丈夫です心配ないです」

全力で遠慮したら高野課長はあっさりと私から離れ、転がっていたパンプスを履かせてくれた。あ、すみません、でもついでもたいに足の甲を撫でるのやめてえ！

でも離れてくれたし、これは逃げるチャンス到来、と考えるべきよね。

床に足がついたのを確認して、机に肘をつき、倒れ込んでいた身体を起こそうとする。でも駄目だった。足首はぐらぐら揺れるし、足そのものに力が入らない。あれあれ？

しつかりしろっ！ どんなに酔っぱらっても家まではちゃんと帰れる子だったはずだろ私！ なのになんで、こんな腰ふにゃんふにゃんになっちゃってるんだ？ 今素面だよ？

「……本当に、あなたは困った人ですね」

「すっすみません……」

体勢変えたらいけるかなと思って反転してみても駄目でした……。ぐっと机に手をつけて力を入れてみても腰がまるつきり役立たず。何かに縋りついてないと立ってられないっ。そうやって一人で力の入らない身体と格闘していたら。

「……またそうやって私を誘うんですから」

するり、と高野課長の手がまたスリットの間から入り込んできた！

ぎゃー！ 反転するってことは高野課長に向かってお尻を突き出すってことだったよ！ だからストッキングのふちに沿って内もも撫でないでえ！

「……やっぱりここで」

「いやいやいやいや会社は勘弁してください、すみませんお願いします」

私、涙目で全力回避。

「じゃあこれくらいは、許してくださいね」

「ほへ？」

急に上半身をぐいっと引き寄せられて、同時に膝の裏をすくわれる。

気付いたら私の身体は高野課長の腕の中にすっぽりと収まって、いた。

おおおおお姫様抱っこですかあああ？

「はい、ちゃんと腕をまわしてください」

「うっ腕をまわすって……」

お姫様抱っこなんてされたことないからわかんないよ！ ていうか、おろして〜。

「あなたの腕を私の首にまわして、そう、しつかりつかまって」

言われるがままに両手をまわして、高野課長の首の後ろで組む。

あれ？

なんかこの体勢って、私が課長に縋りついている感じになっていませんか？

あれ？

さっき断ったはずなのに、なんで抱き上げられているの私？

「じゃあ、行きましょうか」

にっこりと微笑む高野課長を見て、私はようやく逃げられない場所に自ら入り込んでしまったことに気付いたのであった。バカ！

現状を把握したら血の気が引いた。どーしてこんなことになっちゃってんの？

慌てて組んだ手を離そうとしたら、そんなのお見通しだという風に課長は微笑んだ。

「今手を離したら、落ちますよ？」

「おっおろしてください、お願いしますっ」

「嫌です」

ばっさりとお前のお願いを斬り捨てると、高野課長は、じゃあ行きましょねと私を抱き上げたまま歩き始めた。机とパーティションで区切られているフロアをずんずん進んでいく。

私があわわわしているうちにぬかりなく照明と空調のスイッチを切り、施錠し、あつという間にエレベーターの前まで来ていた。

「おろしてくださいっ！」

落ちても仕方がないと覚悟を決めて首から手を離しても、課長の腕はがっちり私の身体を包み込んでいてびくともしない。落ちないじゃん！

課長、見た目全然筋肉なさそうなのに、私の美容体重以上標準体重以下な、要するに下半身以外も決して細くない身体が重くないのかな？ もしや細マッチョってやつ？

いやいやそういう問題じゃないよ、私！

「おろしてえっ」

やっと今の状況をまともに考えられるようになった私は、猛然と反撃を開始した。ばたばたと足を動かして課長の胸に手をつき、離れようと力を込める。が、私を包む腕は全然解けない。こん

やろー！

「嫌だと、言いました。……聞き分けのない子にはお仕置が必要ですね」

え？ お仕置きって？

そう思った瞬間、強い力で顎が掬い上げられて、私の唇は課長のそれによって塞がれていた。

無防備だった口腔に課長の舌があたりまえみたいに侵入してくる。歯茎をすりりとなぞられ、たまらず口を大きく開けてしまう。奥へ奥へと入り込んだ舌に優しく口蓋を撫でられた途端に、背中がぞくりと震えた。上顎を舐められただけでなんでこんなになるの？ 自分で舐めても何ともないのに！

なんでえ？

力が抜けていく。腕からも足からも。そして少しは落ち着きを取り戻していたはずの頭がまた混乱し始める。いや、混乱じゃなくて、何にも、考えられなくなる。

キスは一応、初めてじゃない。だけどこんな、こんなのはしたこと、ない。今しているのと比べたら、今まで私がしてたのはお子ちゃま仕様だった。

課長の顔が、すぐそこにある。

私も課長も眼鏡をかけているのに、全然ぶつからない。こんなに、こんなに近くにあるのに、不思議だ。鼻の頭も、角度を変えるたびに軽く触れ合うだけ。

唇同士はこんなにどろどろに絡み合っているのに。

ちゅ、と音を立てて課長の唇が離れていく。

互いの唇をつなぐ唾液の糸を、課長が舌舐めずりするようにすすった。

「今、自分がどんな顔しているか、わかっていますか？」

「わかんないよ、なんなんだよ。考えらんないよ。」

私は力を入らない身体をくったりと課長に預けた。

全面降伏です。もう無理です。

またちゅ、と大きく音を立てて課長は私の唇を食む。

「……その顔、他の誰にも見せないでくださいね」

意味がよくわからないままに頷くと、課長はものすごく嬉しそうな顔をした。

「あれ鈴木さん、どうしたの」

警備員の吉永さんよしながが高野課長に抱きかかえられている私を見て、驚いたように声をかけてきた。

フロアを最後に出る人は警備室に寄って施錠の確認をお願いしなくてはいけない。最近ひとり残業が多かった私は、夜勤の警備員さんとすつかり顔馴染みになっていた。

「なんだか具合が悪いみたいで、私がたまたま戻ったらぐったりしていたんですよ」

しれっと高野課長が答える。

もちろんそれは真つ赤な嘘で。だけど高野課長のお仕置きによって本当に腰が砕けた私に反論する元気なんぞない。

だつてエレベーターの中でもずうつとお仕置き続行だったんだよ……

ウチの会社のエレベーターに防犯カメラが付いていないのは知っているけれど、抱き上げられてキスされるなんて恥ずかしすぎる。万が一会社の人に見られたらどうすりゃいいのさ！

だけど私の戸惑いとか羞恥しゆうちとかをまるきり無視して、課長はキスを続けた。唇を食はんで、吸つて、絡めて。

「可愛くて、いやらしい。あなたはなんてずるいんだ」

なんて言いながら、高野課長はエレベーターが止まるまで唇を離さなかった。

ずるいつてなんだよ。そもそもね、わたしや何にもしてないよ。

じんじんと痺しびれる唇が熱をもっているのがわかる。きつと明日、私の唇はばんばんに腫はれているだろう。

そりゃあ大変だ、と吉永さんが課長に抱き上げられている私の顔を覗き込もうとする。

すると、高野課長がまるで熱を計るように私のおでこに手で触れて、私の視界を遮さえぎった。私から吉永さんは見えなくなっただけで、ぐつたりと課長の胸にもたれかかる私は、きちんと病人に見えたらしい。

「最近残業続きだったもんねえ。そりゃ具合も悪くなるよ。週末ゆっくり休んだほうがいい」

吉永さんが本当に心配そうに言ってくれて、なんだかすごく申し訳ない気分になってしまった。

ちくしょーっ、なんでこんなに小芝居うま上手いんだ課長。私、車なんて家まで送っていきます、なんて堂々とぬかしやがってー！

でもここで騒いだら恥ずかしいのはこつちなわけで。結局私は課長を下から睨みつけることしか

できなかった。

警備員室前の裏口から出れば、駐車場はもう目の前。この時間、駐車場にあるのは営業さんが使う白いバンばかりのはずなのに、今日は一台だけ大きな車が残っていた。電子音がしたと思ったら、がちゅん、とその車のロックが外れる音がする。

高野課長の車は世界一の車メーカーの大型ミニバンだった。そういえば高い車に乗っているって話を聞いたことがあったような。高いって値段だけじゃなくて車高が高いというのもあったのか。

高価な車っていうと外車しか浮かばない私には車種とかはよくわからない。でも名称として大型でミニバンっていうのがもうなんていうか、矛盾しているなあと思っていた。ビッグバンにしとけよっていう。あれ、でもそんな名前にしたら宇宙が生まれちゃいそうね。

「……このままずっと抱いていたいけれど、少しだけ離れますよ」

名残惜しそうな課長の言葉にちよつとカチンとくる。抱っこしていても大丈夫っていうんなら、ずつとしてればいいんですよ。きつと腕の筋肉は限界突破して明日いや明後日には腕が上がなくなりですよ。生まれたての仔馬こうまのようにぶるつぶると震えて使いものにならなくなればいいさ！と憎まれ口をたたきたいのに私の口から漏れるのは浅い呼吸の音だけで。

なんか悔しい……。腹立つ！ どうにかして逃げられないものか。

身体がちつとも動いてくれない私をそつと助手席に座らせると、課長はきつちりシートベルトも装着させてくれた。もちろんただ座らせるだけじゃなくて、足を撫なでたり、膝小僧にちゅ、とかしながら。

「少しでも我慢していてくださいね」

我慢？ 何を我慢するの？

触られたり口づけられたりするたびに、今まで経験したことのない痺しびれが湧いてくる。逃げ出す方法を考えなくちゃいけないのに、私は声を堪たえるのが精いっぱいだった。

## 2

不意に、ばあん、と大きな音が響いて、我に返る。課長が車のドアを閉めた音みたい。それにしてもよく響くなあ。

「着きましたよ」

いつの間にか、私はうつらうつらしていたらしい。気付いたら車は車庫みたいところに止められていた。車の前は大きなカーテンみたいなもので塞がれている。どこだここ？

「さ、降りましょうね。まだ立ってないでしょう？」

課長はわざわざこちらに回ってきて助手席のドアを開け、私に向かって手を差し出した。

でも車に乗り込んだ時に感じていたあの痺れはだいたい治まっていて、手足にも普通に力が入りそう。

「や、大丈夫で、す」



そして。

そのまま私のつま先に口づけた。

「やっちよつ、課長お！」

ぬるり、と湿っていて温かいものに、指先が包まれるのが、わかる。だっだめだつて言ったのに。一日中靴履いてたから、汚いし、臭いし、ペディキュアだつて剥<sup>は</sup>がれているし！

「だめだめだめだめやめてえええつ……」

「そんなに嫌ですか？」

「嫌です嫌ですごめんなさいですっ！」

「どうして？」

なんで課長はわかってくれないんだろう。どうしてもこうしても嫌なものは嫌だ！

会社にいた時も嫌だつて言ったのに。汚いから、やだつて、言ったのに。

ぼた、と雫が眼鏡に落ちた。

なんで、なんで、わかってくれないの？

今更だけど、はつきりわかった。高野課長は全然優しくなんか、ない。自分の希望ばかりを押しつけて、女の子をホテルに連れ込んだじやうような、ひと。俯<sup>うつむ</sup>いているせいで眼鏡にぼたりぼたりと涙が落ちていく。

やだやだやだやだ。

こんなのはいやだ。

どんなに優しくされても大事に扱われても、課長は私を見てない。私の言うことなんて、聞いてくれない。目的は身体だけなんだろう。私みたいな女は、男の人からそんな風に扱われても当然なのかもしれないけれど。

零<sup>こぼ</sup>れそうになる嗚咽<sup>なげなげ</sup>を堪<sup>こた</sup>えたら、ひゅつと喉が鳴った。それで課長は私が泣いていることに気付いたらしい。

「……どうして泣くんですか？」

ちゅ、とわざと大きな音を立てて課長が私の足から唇を離れた。上目遣いでこちらを見る。

「んっ、だ、だつて」

汚<sup>よご</sup>いって、言った。

臭いから、やだつて言った。

なのに、なんで舐<sup>な</sup>めたりなんか、するの？

しゃくりあげながら、伝える。なんで、私にこんなことするのって。

涙が止まらない。ああ、今きつと私の顔すごいことになっちゃってる。今日のマスクラはフィルムタイプのやつだからギリギリでパンダ目は免<sup>まぬか</sup>れているかもしれないけど。そもそも長時間の残業のせいで化粧はどろっどろだし。

「……泣かないでください」

高野課長の手が伸びてくる。そつと眼鏡を外されて、親指で涙を拭<sup>ぬぐ</sup>われた。

「あなたは何も悪くない。だから泣かないで」

そう言われても出始めた涙は簡単には止まってくれない。

溢れ続ける涙は、頬を伝って顎からぼたりぼたりと滴り落ちる。下から覗き込んでくる、高野課長の眼鏡に、顔に、スーツに。

「私が悪いんです。……私だけが、悪いんですよ。あなたはなんにも悪くない」

すみませんという言葉と共に、ぎゅうつと抱き締められた。そうやって包み込まれると何故だか心地よくて、また、涙が出た。

高野課長のスーツに、私の涙がどんどん染み込んでいく。課長の首筋からふわつと香水のかおりと、ほんの少し煙草の匂いがした。煙草吸う人なのかな。それとも、どこかでついたのかな。

「すみません。……あなたが受け入れてくれたような気がして、調子にのりました」

首筋から背中をそろそろと撫でられる。さっきみたいな感じじゃなくて、私を落ち着かせるためだけに、慰めるためだけに動く手に、安心する。

何故だか私もぎゅうつしてしなくなつて課長の背中に手を回した、のが間違이었다。

「じゃあ、洗つて綺麗にしましょうね」

眼鏡を戻され、そのまま車から降ろされた時のように抱えられて、本日三度目のお姫様抱っこ。目の前には、にっこりと笑う高野課長。

あれ？

今の謝罪はなんだつたの？

わかつてくれたんじゃないやつたの？

「えっあのっ課長！」

「はい、なんでしよう？」

「かつ課長が悪いんですよね？」

一応、確認。

「はい、そうですよ」

おし、敵は自らの過ちを認めた！ 言つてやる、言つてやる、言つてやる！

「……じゃあここでやめとこうとか、思いませんか？」

私の決死の一言に高野課長は少し眉を寄せたあと、また満面の笑みで答えてくれた。

「全く思いません」

ちよつと、どうなつてんのおおおお！ 私の涙、返して！

「……逃がさないと、言いましたよ？」

確かに、言われました、よ？ だけど、だけど、だけどお！

呆然とする私を抱えて、高野課長は靴を脱ぎ玄関から室内へと続く扉を開けてしまう。大きな音を立てて、玄関の扉が閉まった。

あ、玄関で帰るつていうのは、もう無理っぽいですが、ね……

高野課長は私をソファに降ろすと、少し待っていてくださいね、と言つてすぐさま入り口とは違う扉の向こうへ消えた。ザーツと水音が聞こえてくる。……トイレでも我慢していたのかな。

どうしたらいいかわからなくて、思わず室内をきよるきよると見回してしまう。初めてのラブホ

テルは、思っていたほど奇抜な造りじゃなかった。

なんか勝手なイメージなのだけれど、鏡張りだったりとか、うす暗かったりとか、そういうぱつと見ていかかわしい雰囲気を漂わせてるもんだとばかり思っていたので……

だってなんか派手なネオンとか、入り口にのれんみたいなのがかかってたりとか、怪しいじゃん。綺麗なフローリングの床に、ふかふかのラグが敷いてある。白いソファにガラスのローテーブル。まるで、ちよつとおしゃれな人の家みたい。

ダウンライトと間接照明がたつぷりと使われていて、暗すぎず、明るすぎない。こ、これがムーデイってやつですか。

おおっ、プラズマクラスターがある！ テレビでかい！ コップやお茶なんかは普通のビジネスホテルとか旅館とかのようにキャビネットの中に並べられている。こういうのは一緒なんだね。でも木製のラティスパーツィションの向こうにどカーんとダブルサイズのベッドが見えて、物珍しさに舞い上がっていた気持ちだが、一気に冷めた。

なにのんきに観察しちゃってんの、私！  
に、逃げよう。

課長がトイレに行っている今こそ、チャンスじゃん！

がぼつと立ち上がって入り口に向かってダッシュ！

……しようとしたら、思いっきりラグに足をとられてこけた。ま、間抜けすぎる。がっくりどうなだれていたら背後から呆れたような声でした。

「何しているんですか？」

はい終了！

ぐずぐずしていてチャンスを逃す。つくづくバカだな、私。

「何もしてませんけどっ」

四つん這いという間抜けな格好からなんでもない風を装って、立ち上がる。と、逃亡失敗しました、なんて言ったら、どつどうなっちゃうんでしょう。なんか、怖いものを感じるんですけど。振り返りたく、ないんですけど！

ぎゅつと目を閉じたら、後ろからすごい力で抱き締められた。

「……まったくあなたからは目を離せませんね」

「すみませんごめんなさいっ！」

「……ダメ、許さない。お仕置きです」

お仕置き、やだっ……！！

またキスなんてされたら、もう、きつと、逃げられない。

とっさに顔を背けようとしたのに、またがっちり顎を掴まれて捻るように後ろを向かされ、唇を塞がれた。ひんやりした唇と熱い舌が私の唇をこじ開けようとす。

いや、ここは抵抗させてもらう！ 死守です！ 今更たけど！ でもそんなことしていたら、ふぁ、い、息ができません……！！ いや、鼻ですればいいってわかっているんだけど！

耐えきれずになんとか息継ぎしようとしたら、あっさり侵入を許してしまいましたよ！ はい、

無駄な抵抗でしたね……

入り込んできた課長の舌から、冷たいミントの香りがした。あれ、さつきまでは、そんな香りしなかった。

もしかして課長、さつきいなくなったのって、トイレじゃなくて、歯磨きのためとか？

——汚いって、言った。

——臭いから、やだって言った。

——なのに、なんで舐めたりなんか、するの？

もしかして。

私が自分の足を汚いと言ったから。そんな足にキスしたから。課長は私とその口でキスされるのを嫌がっていると思つて、わざわざ歯磨きしてきたのだろうか。

「かちよお……、はあ、ん、歯、磨いた？」

なんとか課長の攻撃をかわしつつ、尋ねてみる。

そしたら課長は面白そうに、笑った。

「綺麗にしました」

あなたのために。

その言葉を聞いたら、なんでかまた、口蓋からあの痺れが走った。

あ、ダメだ。

私の腰はまた、ぐにゃんと碎けてしまう。私の身体から力が抜けたのがわかったのだろう。課長の腕の力が緩んで、私は包まれるように優しく抱き締められた。

その温もりはさつきの強引さとは全く違うもので、私の頭はまた混乱し出す。

そもそもなんで高野課長は私にこんなことをするんだろう。私なんて、男の人から好かれるはずなのに。

営業一課のスーツを着ている方、もしくは地味な方っていうのが、私の呼ばれ方だ。スーツじゃない方である恵美ちゃんの方が、よっぽど可愛くて、美人なのに。

「そんなに、嫌ですか？」

高野課長の唇が、ゆっくりと離れていく。

「泣くくらい、私とこうするのは、嫌ですか？」

知らないうちにまた涙が溢れていた。

違うの、違うの、課長のせいじゃないの。

私のせいです、課長。

「ちがう……」

「嫌じゃない？」

嗚咽を堪えながら、頷いた。どうしてこうなったのかっていう疑問はあるけど、自分でも不思議なことに、嫌ではないんだもの。

この涙はそういうんじゃない。

課長は力が抜けてふらつく私の身体をまたぎゅっと抱き締めると、ゆっくりとソファに座った。私は課長の膝の上へ横向きに座らせられる。

小さい子を寝かしつける時にするように、課長が私の肩を優しくとんとんと叩いてくれる。「……なんで、私なんですか？」

恵美ちゃんは元々すごく可愛いうえに、毎日ものすごいおしゃれをして会社に来ていた。ウチの会社は服装の制約が多いのに、毎日きっちり違うコーディネート。読者モデルとして雑誌に掲載されているのを見せてもらったこともある。おしゃれでセンスがいいし、美人だし、明るくて性格もいいし、本当にどこから見ても可愛い女の子って感じだった。

同僚でおおかつ年齢も近かった私は必然的に恵美ちゃんと比べられ続けた。

普通だったら課長は恵美ちゃんの方を好きになるはず。だって彼女の方が女として上だってことは、一目見ればわかるもの。

どうして私は課長にキスをされているのか。

どうして私はそれが嫌じゃないのか。

だって今までの自分じゃあり得ないんだ。

私は男性とまともに付き合ったりなんてできないって思っていた。なのに今、男の人にキスされて、抱き締められて、こうしてホテルなんかにいる。

「迷わなくてもいいんですよ。あなたは何にも悪くないのだから。悪いのはみーんな、私です」

違う。違うよ、課長。私は男女の仲なんてよくわかんない面倒くさい処女だけど、こういう風になるのには私にも原因があるはずだよ。

「ちがう……」

すん、と鼻をすすったあと、顔を上げて課長と視線を合わせた。きつと私の顔はすごいことになっている。いくら落ちないマスカラだって、無事じゃないだろう。

それなのに課長は優しく私の眼鏡を外すと、ぐちゃぐちゃの顔をてのひらでなぞるようにして拭い、困ったように笑いながら、違いませんよと、言った。

「全部私のせいにしちゃえばいい」

止まらない涙も、ぐちゃぐちゃ湧いてくる葛藤も、迷いも、全部？ それって、私、ずるくない？ 「課長は悪く、ない。悪いのは、変なのは、私の方、なの」

一度口から零れてしまうと、もう止められなかった。気がつく和高野課長に洗いざらいぶちまけようとしていた。

長い間忘れようと努めてきたのに、それでもなお心にしぶとく居座り続けている思い出を。

「……ずっとずっと前のことだけだ」

それは些細な出来事から始まる、トラウマと言うのもおこがましい小さな話。

中学生の時だった。

日直だった私は、英語の先生からノートの回収をするように頼まれた。ところがなかなか提出してくれない男子がいたのだ。何度声をかけても無視されて、仕方なくこっちを向いてもらうために

肩を叩こうとした。

『ねえ、ちよっと』

変な意図は全くなかった。

その男子に特別な感情はなかったし、今となつては顔すら思い出せない。だけど彼はそうじゃなかった。

『うっせえ触んな、汚ねえ』

汚い物を振り払うように、彼は私の手を思い切りはたき落とした。

本当に、些細な出来事だ。

彼は可愛くもない私みたいな女子に触られたくなかっただけ。

だけれど叩かれた手は痛かった。心はもつと、痛かった。

それから私は男子とともに話せなくなつた。また汚いって言われるような気がして。

語っているうちに、涙が、感情が、少しずつ収まっていく。

「自意識過剰だつてことは、わかっているのに。自分が気にするほど相手はこちらに関心がないつてことも」

「……中学生の頃なんて、誰だつて自意識の塊かたまりのようなものですよ」

「違うんです。もう十年経つのに、まだ、同じ気持ちなんです。……執念深いでしょう」

「……いいえ」

理屈じゃないのだ。男性と接するとなると、条件反射のように身構えてしまう。また痛い思いを

させられるのではないかと、思ってしまう。

「男の子と話せなくなつた私は女子高に進学して、高校時代は先生と家族以外の男の人とはほとんど話しませんでした」

というか、チャレンジしようとすら思わなかった。

「でもこのままじゃいけない気がして、付属の女子短大じゃなくて情報処理の専門学校に進学したんです。そこで少しづつ、少しづつ、リハビリするみたいに男性に慣れていきました」

きちんとして見える落ち着いた格好と、雑誌を見ながら練習したメイクで可愛くない自分を最低限のレベルまで引き上げて挑んだりハビリ。二年間の共学生生活を経て、なんとか必要なことくらいはごく普通の調子で話せるようになった。

「でも……男性と話す時に緊張しちゃう癖は、治らなかつた」

「会社ではそんな風には見えませんでした」

「仕事の時は大丈夫なんです。必要に迫られて話しているわけですから」

さらに配属された営業一課が、三十代後半より上のおじさんしかいなかったことも大きい。お父さんくらい年齢が離れている人だったら苦手意識もあまり感じないで済むし、おじさんたちから見ても私は子供とか、やかましい小娘というような位置づけだと感じるから。

若い人が多い営業二課とか商品管理課とかだったら胃に穴が空いていたかもしれない。そのくらい、男の人が苦手だ。さらりと雑談なんてどうやってするのか見当もつかない。

だから、彼氏だ、恋愛だなんて夢のまた夢。

とにかく慣れだよ慣れ、と友達は私を合コンやら飲み会やら、集まりのたびに誘い出してくれる。でも気のきいた話題を提供できるわけでもなし、媚こぼを売れるわけでもなし、特別可愛いわけでもなし、なしなしくしの私に近づいてくる男の人なんているわけもない。

会社では社内恋愛なんて興味ない、つて風を装っていたけれど、ぶっちゃけ私は恋愛以前に、男の人が苦手なままなのだ。だから私を素通りしていく男性の視線に、いつも安心していた。

「専門学校の時、同級生と三ヶ月だけ付き合っただけです。でも、四、五回デートしただけで、ふられちゃいました。私といっても、つまらないって言われて」

お付き合いというものは、後にも先にもその一回だけ。

「……私はコンプレックスと自意識のカタマリみたいな、面倒くさい女なんです」

たったの三ヶ月で、ふられちゃうくらい、つまらない女でもある。

だから、男の人には好かれたい。そんなの当然のこと。

「あなたの過去は、あなたのせいではありませんよ」

「違います。私のせいですっ」

誰かのせいにしてしまうのはすごく簡単。

私が男の人と話せないのは、私の手を払いのけた同級生のせい。私をふった彼のせい。

でもそれじゃ何も解決しない。

自分の境遇の責任は自分にしかない。

だって私がその道を選んだのだから。誰かが決めた道を歩いてきたわけじゃないんだ。

だから私が地味でもてないのは自分のせい。課長とラブホテルにいるのも自分のせい。キスされて、涙が止まらないのも、自分のせい。

課長のせいなんかじゃ、ない。

ああ、頭の中がぐちゃぐちゃだ。

私は一体何を言いたいんだろう。

もうわけわかんない！

「私、可愛いなんて、ないし」

「可愛いですよ」

私の否定するものを、課長は即肯定してくれた。それでも。

「可愛い！ 何ひとつ可愛いところなんてない！ 無駄にでかいお尻も太い足も嫌い！」

「そんなこと……」

課長の言葉を遮るおさえように、私は一気にぶちまける。

「要領がよくないとこも、愚図なところも、全部全部、嫌い！ 自分の何もかもが大っ嫌い！」

思ったことを全てを口に出すと課長は大きいため息をついた。と思ったらいきなりきちんとセツ

トされている前髪に手をつ突っ込んでぐしゃぐしゃとかき回す。

その苛だたしげな様子に、私はうなだれる。

……こんなところでべそべそ泣いて、最低な女だよ。厚かましいよね。呆れたよね。私みたい

な冴えない女がほんと何しちゃってんのって話だよ。

課長の言葉を鵜呑みにしちゃあ、いけない。男の人のサービストークってやつなんだ。課長はさ  
らっとラブホテルに女の人を連れ込めるくらい恋愛経験があるんだから、このくらいのリップサー  
ビスは朝飯前だろう。

我儘や泣き顔が可愛く見えるのは恵美ちゃんみたいな、年をとつても「女の子」っていう雰囲気  
を持っている一部の人のみだけだ。私は違う。私は。

私はコンプレックスと自意識を混ぜてこね上げて固めたような面倒くさい女だから、男の人に好  
かれないのは当たり前。

ふう、と課長が気を取り直すみたいに深く息をついた。

「……あなたという人は」

「はい」

怒られるのだろうか。軽蔑されるのだろうか。

私みたいな女が泣いても見苦しいだけってわかっているのに涙が止まらない。あとからあとから  
湧いて出てくる。涙の原料は血液だって聞いたことがある。こんなに泣いたら私、貧血になつてし  
まうんじゃないの？

「もう手加減しないことにします。じゃないと、理解してもらえなさそうだ」

「はい？」

感じがあんまりよくないから、普段はなるべくしないようにしている語尾を上げた「今の何です  
か？」みたいな返答がぼろりと漏れた。手加減？ 何を加減していたの？

「もう本当に、逃がしません」

課長の瞳が光ったように見えたのは、気のせいだろうか。それに気をとられて、私は最後通牒の  
ような課長の言葉を、右から左へと聞き流してしまった。

だから間抜けにも「はい」なんて、答えてしまったのだ。

——本当に、逃がしません。

その言葉の真意を考える間もなく、課長はまた私に口づけた。唇を優しく食み、舌がするりと私  
の中に侵入してくる。抵抗なんて、もう、できない。

熱い熱いそれを感じただけで、また口蓋から痺れが湧き出したから。

撫でられ、吸われて、無意識のうちに応える。目の前には、細められた課長の優しい瞳がある。課長、  
目、閉じないんだ。いや私も閉じてないけど。キスする時に目を閉じるのはどうしてだっけ？ 現  
実を見ないようにだっけ？ 息を継ごうと唇を離れた時、ぼつりと呟くように課長が言った。

「……好きです」

何が？

反射的に思ったことは、課長に見抜かれていたらしい。

課長は苦笑しながら、私の目尻から溢れ続ける涙を舐めた。涙は舐めても害はないのかな。しよっ  
ぱいだけかな。

「私はあなたのことが好きです」

「……ふえ？」